

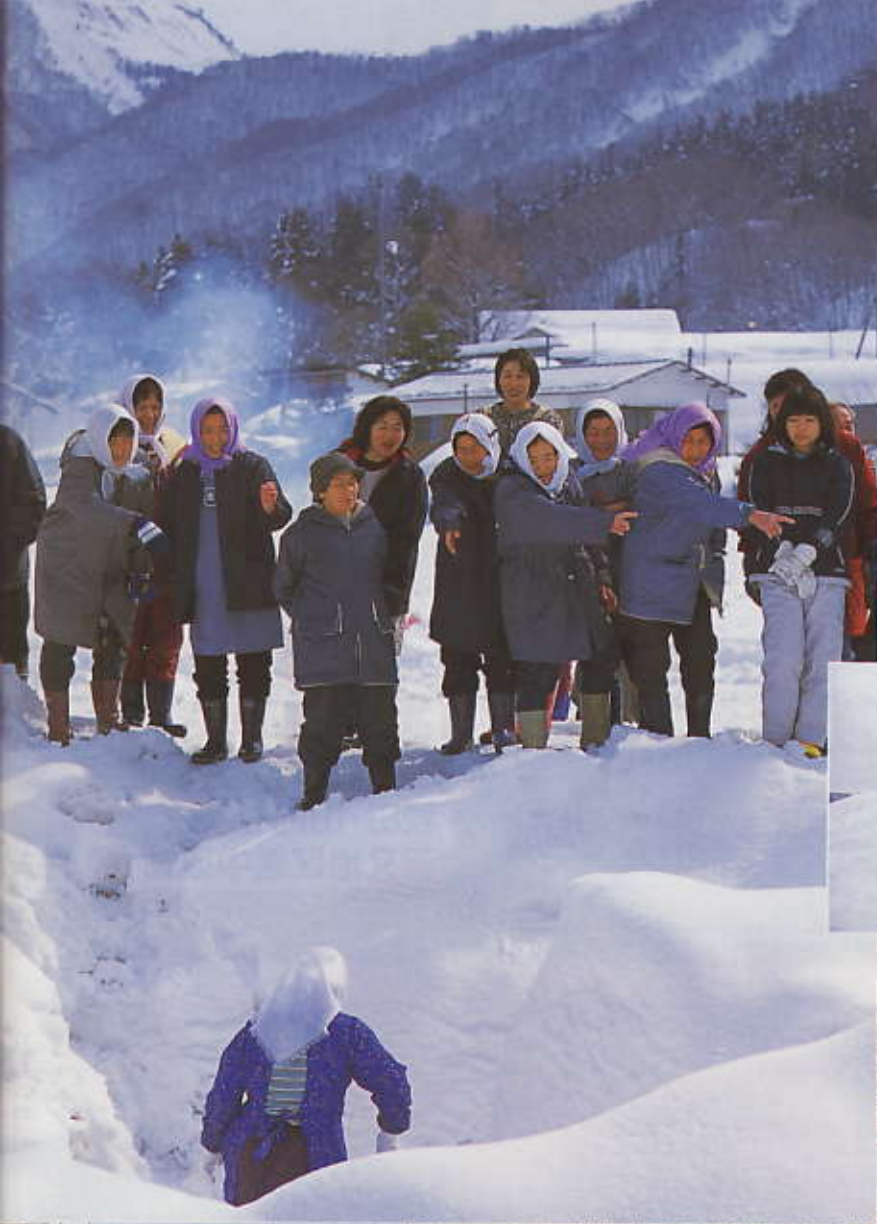


個性輝く
まちづくり

三つの集落が一つの家族のように 老いも若きも集う

秋田・山内村
三又地区雪中運動会

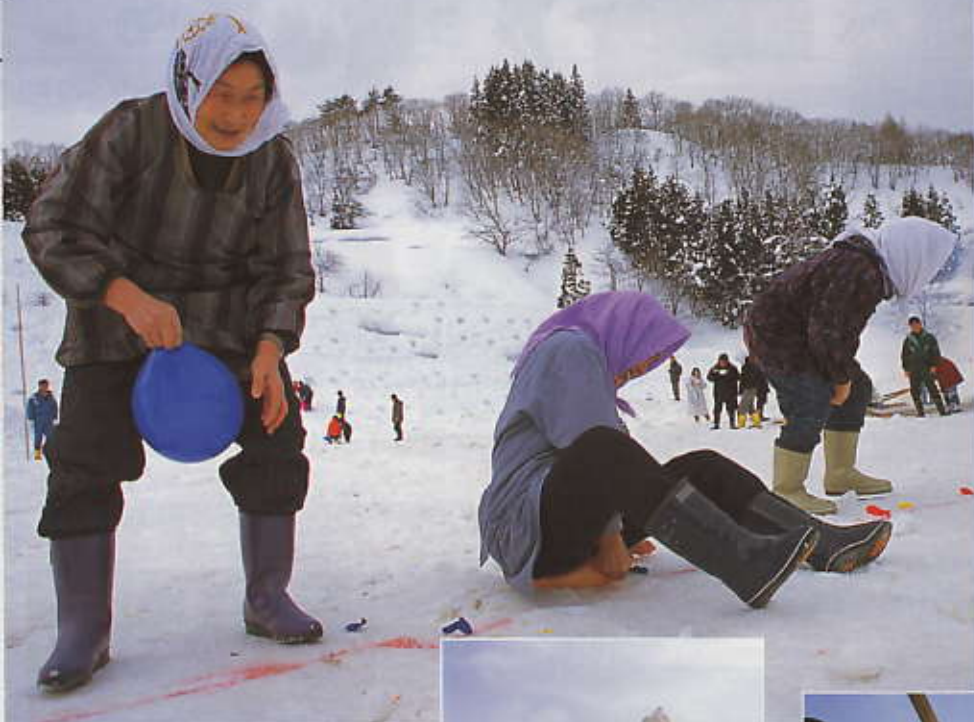




岡目八目とはまさにこのことだ。競技種目の一つ「地区対抗迷路リレー」(写真左)で、高さ二メートル、全長五百メートル、雪の迷路の中を三つの集落から選出された選手たちが、右往左往するなか、迷路の上から見下ろして応援している人たちが「そこを右に曲がって」「そこはまっすぐよ」などと声をかけている。

山内村三又地区は、秋田県の東南端に位置し、奥羽山脈の懷に抱かれた日本有数の豪雪地帯。世帯数約百、人口は四百。貝沢、下タ村、松沢の三地区(集落)からなる。二月十七日の日曜日、この豪雪を利用しての三集落対抗の雪中運動会が開催された。プログラムは、子どもを乗せたソリを親が曳く馬力競争、婦人会員による風船割り競争、斜面を滑り降りるケツゾリ競争、迷路を使った競技では、リレーのほかに老人クラブのお年寄り子どもが一緒になって迷路に隠された宝物を捜す宝さがし、今年から新たに競技種目に加えられた長靴飛ばしなどユニークな種目がつづく。そして全員参加による綱引きのあと、「テキギ」と呼ばれる木の枝で各集落ごとに餅をつきあげ、できたての黄粉餅をほおばりながらの終了となる。まさにお年寄りから子どもまで全員参加の運動会だ。また、運動会の最中に巨大な紙風船もあげられ参加者の眼を惹いた。

雪中運動会は、今年で二十二回を数える。当時のスポーツ奨励員の発案で生まれ、地区



の一大イベントとしてすっかり定着した。

運動会の準備や運営は地区の各種団体が総出で行う。前日には、老人クラブのご婦人方が、テキギづくりのため切り出された木の皮を剥いでいく。老人クラブの男性たちは、斜面のミニキャンダルづくりにいそしんでいる。運動会当日は、婦人会の面々がとん汁づくりに精を出す。そして運動会の司会や審判員はスポーツ奨励員といった具合である。

このなかでも、大きな役割を果たしているのが、建設会社の経営者、一級建築士、農協職員といった職業をもつ人たちが構成される麓友会と名づけられたグループだ。

迷路づくりや運動場の整備には、建設会社経営のメンバーがショベルカーやブルドーザーを提供し、一週間前から整備に取りかかっている。運動会前日の前夜祭も麓友会の主催だ。前夜祭では、ミニかまくらに火が灯され、幻想的な風景をかもし出している。また二つの巨大な紙風船をあげたが、惜しくも二つとも綱が切れ、一つは川に落ち流されてしまった。運動会当日にあげられた風船は、再度挑戦しみごと成功したもの。

麓友会の活動は、雪中運動会だけではない。麓友会は地域の資源を見なおし、個人でできないことをグループで取り組み、「夢のある楽しい地域」をめざして昭和六十三年に結成された。明治時代、農聖と言われ、貧農救済



に生涯をささげた石川理紀之助の精神を生かそうと「麓友会」と名づけられた。これまで、砂防ダムの落差を利用して水力発電をつくり、その電力を利用してイルミネーションを灯している。水力発電の羽根の部分は、消火器や自動車のシャフトなどの廃物を利用。そこからワイヤーを二百メートル先の山頂まで張り、鉄パイプの鉄塔を建て、一千個ほどの電球の電源としているもの。これらは、すべて手づくりだ。このほかにも、会員たちが養殖したイワナやニジマスを放流しての三又溪流まつり、村祭りを復活させたのも麓友会。

そして麓友会が、今めざしているのは、ゆるい里の整備。これまで作った水車に加え、炭焼場、釣り場を整備し、地域の人たちが、そして地域外の人たちも憩える場にしようとして、写真真を描き、村役場に働きかけたり、財源確保のための助成財団への働きかけを行っている。

農聖石川理紀之助は「一つの村が一つの家族のように」という願いを日頃語っていたという。麓友会、そして三又地区の人たちは、平成の時代にまさに、地区が一つの家族のようなになることをめざしてがんばっている。

■連絡先 平鹿郡山内村三又字落合

三又建設下村基作さん

TEL 〇一八二一五三一五〇二一